



【『まさか』『またか』令和8年・熊本地震】

7月28日、午後4時27分、熊本を再び最大震度7の激しい揺れが襲いました。10年前の熊本地震から、ようやくここまで復旧・復興を遂げてきた矢先の出来事でした。『まさか』『またか』：多くの県民の皆さまが同じ思いを抱かれたのではないのでしょうか。

改めて、お亡くなりになられた方々に心からお悔やみ申し上げますとともに、被災されたすべての皆さまにお見舞い申し上げます。発災からひと月余り。被害の全容把握と復旧への取り組みが続いています。だからこそ、今一度、発災直後から自らの目で見て、耳で聞いてきた現場を振り返り、これからの復旧・復興、そして次なる災害への備えについて考えたいと思います。

私は地震発生直後から地域や企業へ連絡し、翌早朝から被災現場を回りました。断水が続く地域、停電で発電機の燃料確保に苦慮する福祉施設、液状化で亀裂が走った農地や道路、被害を受けた保育園や事業所。10年前の地震からようやく復旧したにもかかわらず、再び大きな被害を受けた企業もありました。

現場を歩いて痛感したのは、報道される大きな被害だけが災害のすべてではないことです。報道には映らなくても、一軒一軒、一人ひとりに深刻な被害があります。**「相談を受けたら、まず現場へ」**。自らの目で確かめ、声を聞き、必要に応じて県や市、関係機関へつなぎ、できる限り迅速な対応を求めています。



地震で大きく傾いた電柱

現場を回る中で、改めて強く感じたことがあります。災害はすべての人に等しく襲いかかりますが、その影響は決して同じではありません。高齢者や障がいのある方々が暮らす福祉施設では、断水やボイラーの損壊によって入浴できず、入所者を他の施設に移動せざるを得ない状態が生じました。酷暑の中、衛生環境の悪化は体力低下や感染症など二次被害にもつながりかねません。また、子どもたちを預かる施設では、安全が確認できなければ再開したくてもできません。

声を上げたくても上げられない人がいる。困っているも行政まで声が届かない現場がある。だからこそ、私たちが現場へ足を運び、その声を行政につなぐことが肝心です。

今回、特に胸が痛んだのは、10年前の熊本地震で被災し、ようやく再建を果たした企業や施設が再び大きな被害を受けたことです。前回の震災でグループ補助金などを活用して再建したものの、自己負担分の返済が今も続いている事業者もあります。その中で再び借入を重ねなければならぬとすれば、事業継続そのものを断念することにもなりかねません。

10年前と同じ支援制度をそのまま当てはめればよいとは限りません。**「二重被災」という今回特有の事情を踏まえ、既存債務への配慮や新たな負担を軽減する仕組みなど、国・県が柔軟な支援策を講じる必要があります。被災された方々が「もう一度頑張ろう」と思える制度をつくることも、政治の重要な責任です。**

発災直後のイベント中止や自粛は、安全確保の観点からやむを得ません。一方、時間の経過とともに県内の旅館やホテルではキャンセルが相次ぎ、街中の飲食店や卸売業などからも切実な声が届いています。

被災地への支援を最優先することは当然です。しかし、安全が確認された地域まで社会全体がいつまでも立ち止まってしまえば、今度は地域経済が疲弊し、復興そのものを遅らせることにもなりかねません。

被災された方々を支えながら、**安全が確認された地域では日常を取り戻し、経済を回していく。その流れをつくることもまた復興です。**行政には被害への対応だけでなく、適切な時期を見極め、県民や県外に向けて前向きで力強いメッセージを発信することも求められます。

【二度の震災を、次代への教訓に】

わずか10年余りの間に、私たちは二度の大きな地震を経験しました。「なぜ、また熊本で」「なぜ、私たちの時代に」と思わずにはいられません。しかし、悠久の時を刻む大地の歴史から見れば、私たちの人生はほんの一瞬の「点」にすぎません。地震は人間の時間軸とは関係なく発生します。だからこそ、「また被災した」で終わらせてはなりません。

二度の震災で明らかになった住宅の耐震化、インフラ、福祉施設、地域経済、事業者支援などの課題を徹底して検証し、次なる災害への備えにつなげる。そして、その経験と教訓を次の世代へ引き継ぐことが、今を生きる私たちの責任です。地震は時代を選ばない。しかし、その時代に生き合わせた私たちには、果たすべき役割があります。その責任を胸に、これからも現場を歩き、一日も早い復旧・復興と、災害に強い熊本づくりに全力で取り組んでまいります。



被災した農地を関係者と現地確認



被災により避難所として使用できない施設



天井が崩落した施設内部

【地域の力で支えられる夏祭り】



7月25日、毎年この時期は各地で夏祭りが開催されます。有り難いことに今年も7か所を駆け足で訪問しました。本来であれば、それぞれの会場で実行委員会や地域の皆さんとゆっくりお話ししたいのですが、ほぼ同時刻の開催という限られた時間の中ではそれもないままに改めて感じたのは、夏祭りは当日の数時間だけで成り立っているのではないということです。役員の皆さんは何度も会議を重ね、当日も早朝から会場準備に取り組み、少しでも暑さを和らげようとグラウンドへ水をまくなど、安全な環境づくりに尽力されていました。

また、交通安全協会、防犯協会、消防団など多くの皆さんが来場者の誘導や安全確保に当たられていた姿も印象的でした。

一方で、近年は災害級の暑さが続いています。実際にある校区では子どもたちや参加者の安全を考慮し、開催時期を秋へ変更したと伺いました。夏祭りは地域の絆を深める大切な行事だからこそ、その意義を守りながら、安全との両立をどう図るのかを考える時代に入っているのかもしれない。

酷暑の中、夏祭りの開催を支えてくださったすべての皆様に、心から敬意と感謝を申し上げます。

※8月号は地震の影響で配布が遅延しました。改めてお詫び申し上げます。

※本稿は8月20日時点の状況をもとに執筆しています。

高島和男事務所

〒862-0962
熊本市南区田迎 2-17-7

動画を毎月公開しております！
ホームページをぜひご覧ください。



届けます！あなたの思いを県政に

TEL.096-288-6004

<https://takashima-kazuo.com>

高島和男サポーター募集中です！

FAX.096-288-6009

Facebookもやっています！

